

魚津水族都市 ～地域全体を水族館に見立てた、水族館の4つの役割が核となる新しいまちづくり～

01 まちの調査 - 魚津の現状

職に関する現状 ⇒第5次魚津市総合計画 重点施策より
 魚津市では少子高齢化の進行に伴い、**労働力人口が減少**している。これにより、産業全体の活力が低下している。また、若者が進学や就職を機に市外へ流出するケースが多い。地域の雇用環境が十分でないことが課題となっており、**若者や女性が都市部へ転出し、地域に定着しにくい傾向が続いている。**

産業別雇用の課題
 第一次産業：後継者不足や効率化の課題
 伝統産業維持困難
 製造業・興業：労働力不足
 サービス業・観光業：観光資源活用不足
 雇用創出

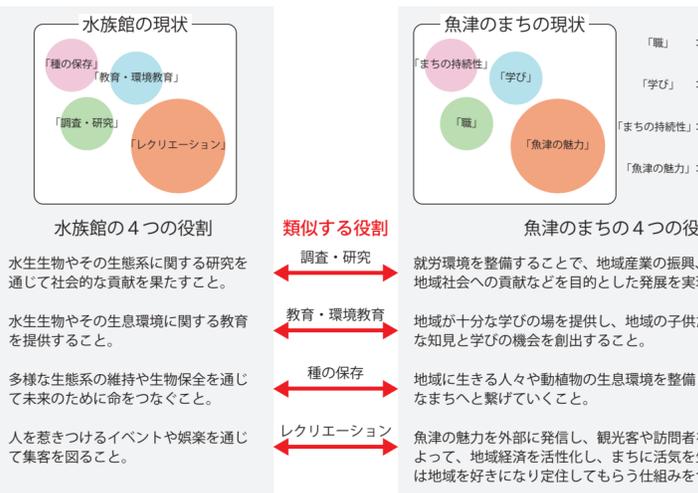
学びに関する現状
 市民に対するアンケートの回答より、**学びたい学問が魚津にない**ことが課題として挙げられる。また進学機会や選択肢の少なさも課題であり、それが原因で都市部へ若者が流出したり、地元に残る学生も進学の選択肢が少ないことから専門分野や将来のキャリアに合った進路が見つけにくい状況にある。**地域と連携したキャリア教育も不足**しており高校生や大学生が地元企業や地域社会と関わりながら学ぶ機会が十分に得られていない事も予想される。また地域特性として交通アクセスの不便さが学生への負担になっている可能性もある。

まちの持続性に関する現状
 まちの**整備不足や交通利便性の低さ**が、住民の日常生活に影響を与え、定住人口の減少を招く要因となっている。また、老朽化した公共施設の補修・利用促進が進まず、地域コミュニティの活性化が遅れている。さらに、イベント時の交通渋滞や県外からのアクセスの悪さも課題点として挙げられる。**駅や主要施設など拠点間のアクセス効率も悪く**、地域住民や観光客の移動に負担を与え、公共サービスの利用率が低下している点も課題となる。これらの課題の解消には、住民と観光客双方の目線でインフラ整備と持続可能なまちづくりが求められる。

魅力発信に関する現状
 魚津の海岸地区には多様な豊かな生態系や地域資源が点在しているが、その活用が進んでおらず、**地域の特徴を十分に発信できていない**点が課題となっている。これらの地域資源には、歴史的価値のある「旧大町小学校」や「米倉」の建築物、利活用が期待される空き家、観光スポットとしての「海の駅蟹気楼」、自然遺産である「埋没林博物館」などがある。海岸線地区も奇観や西に開けた美しい景色を有し、それぞれが地域の魅力を支える重要な資産でありながら、現状では**十分な魅力発信や利活用には至っていない。**

02 現状の分析 - 水族館の4つの役割と魚津が抱える課題と役割の類似性

水族館には本来、「種の保存」「教育」「調査・研究」「レクリエーション」の**4つの社会的役割**があり、これらをバランスよく果たすことが求められる。しかし、収益確保を重視するあまり、レクリエーション目的の運営に偏る傾向にあり、本来あるべき社会教育や生物多様性の保全といった重要な役割が十分に発揮されないことがある。魚津の抱える課題は、水族館が果たすべき**4つの役割の現状と類似性が見られる。**水族館の4つの役割を都市スケールで捉え、整えることで、**地域課題を解決することができるのではないかと見られる。**



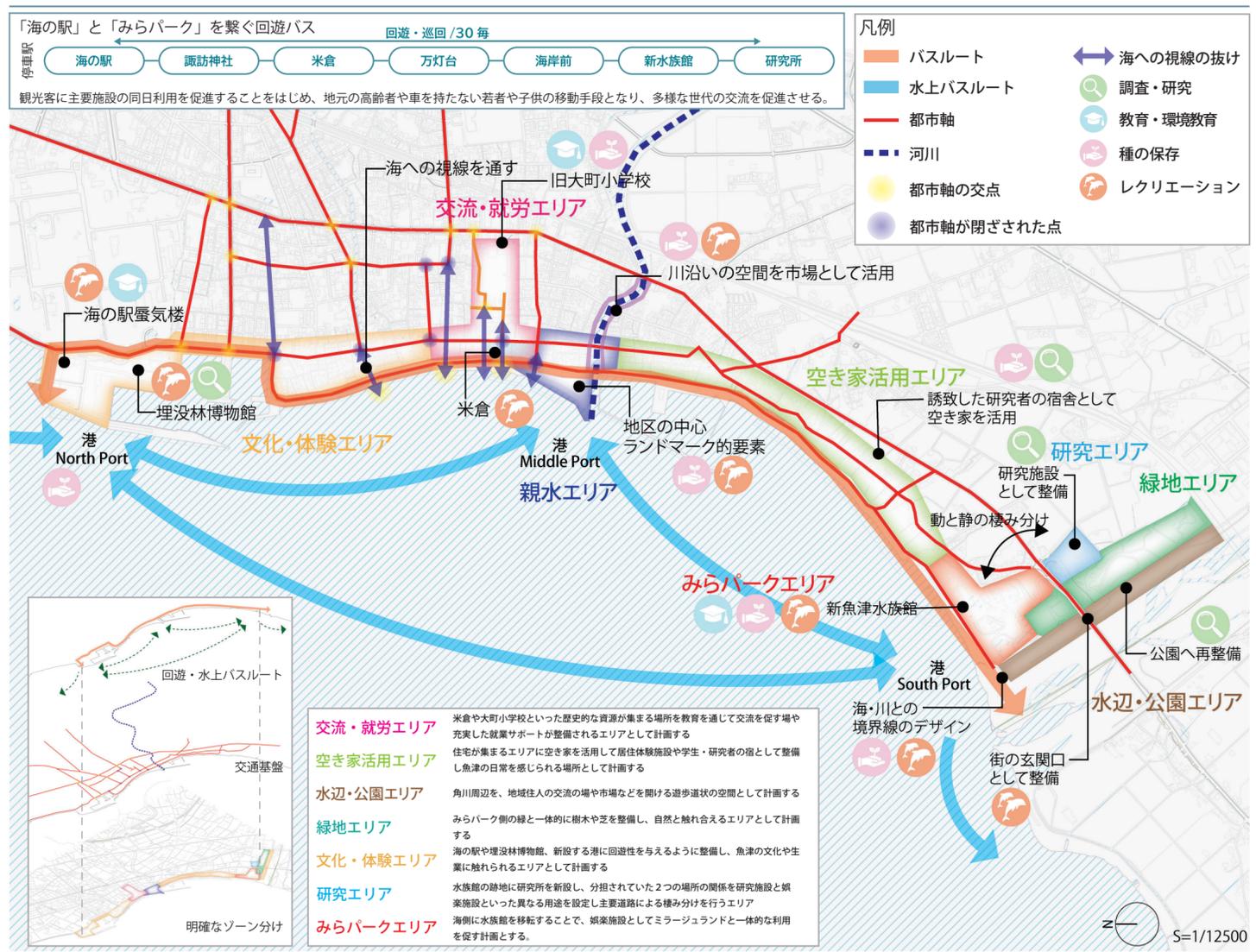
04 デザイン手法 - 4つの役割をまちスケールで読み替え、地域の価値を向上させる



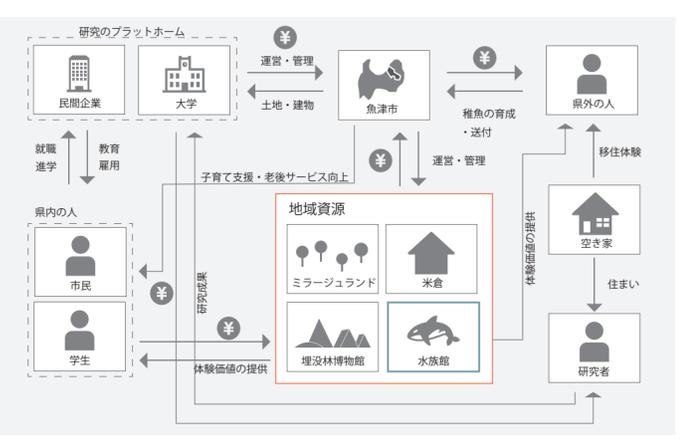
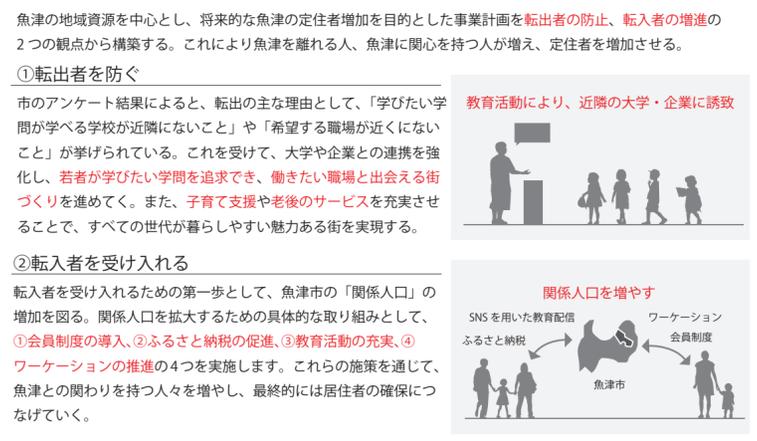
03 コンセプト - まち全体を水族館に見立て4つの役割を展開する



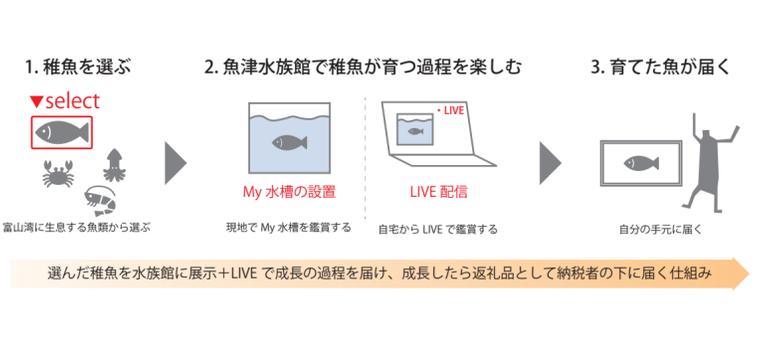
05 地区計画



06 定住人口を増やすための事業スキーム



07 ふるさと納税を利用した魚津の魅力発信

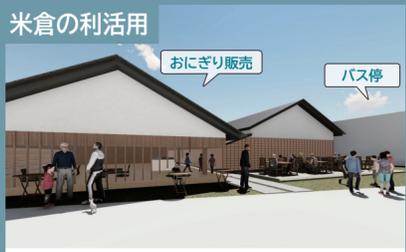


08 事業スケジュール





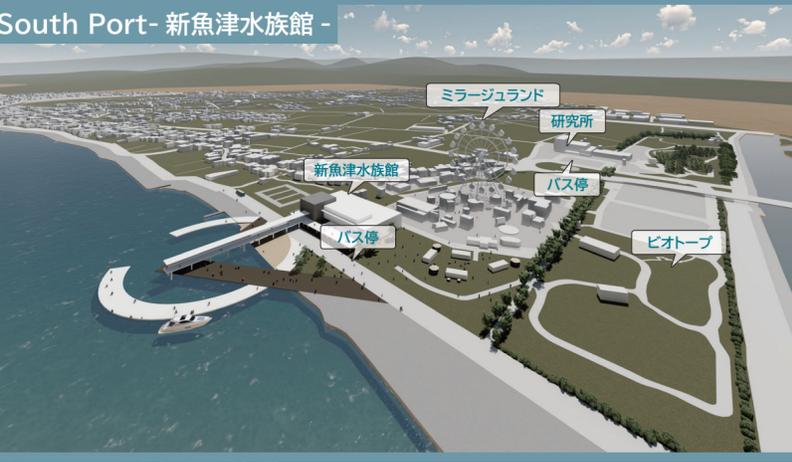
体験を促す港
 魚釣りが楽しめる港を整備。この港では、「釣る」「調理する」「食べる」という一連の体験をすることが出来る。港としては海への視線が抜けるようにボリュームを計画。また、海の駅・埋没林博物館とランドスケープで一体的に繋げることで両施設の同時利用を促し、魚津の歴史や文化に関しても同時に学ぶこと出来る場とした。



Park-PFIの活用
 米倉は魚津の食の文化を発信する場として機能させる。Park-PFIを用いて米倉前を広場として整備し、一部に魚津のお米を取り扱うお店を導入することで市としての利益を確保しながら、企業による安定的な運営が行えるようにした。これにより訪れた方々は米騒動の文化を感じるとともに魚津の美味しいお米を楽しむことが出来る。



淡水魚と親しむことのできる市場
 角川沿いは川と人との距離を近づけるために整備を行った。階段を設けることで川との距離を縮め、一部を川の水面のレベルより下げることで川を泳ぐ魚津の淡水魚を観察出来るコーナーとした。また、イベント時には市場を開催することで、魚津の大地で育てられた水産物を食べ歩ける遊歩道状の空間とした。



みらパークの計画

■ゾーニング
 水族館の位置を海岸線沿いに移動することで、海との一体的な利用を図ると共に、現水族館の跡地に研究所を新設することで、県道を挟んで”静と動”の棲み分けを行う。ミラージュランドの南東側にあった駐車場は公園として整備することでみらパークの緑地と一体的に、県道により分断されたエリアをランドスケープとして繋ぐ。川沿いにはデッキを設けることで川との距離を縮めた。

■動線計画
 歩行者と回遊バス、一般車両、自転車の動線を明確に分離し整理することでみらパーク付近の交通渋滞を緩和させる計画とした。また、歩行者の動線として海へ続く歩道を整備することで海へ視線がぬけるようにした。

水族館の展示内容

水族館の展示内容は1・2・3代目を継承する形とし、ホテルイカ館や蟹気楼館、アクリルトンネル、湧水を用いた噴水を取り入れ、魚津の地域資源と生態系に関して楽しく学べる水族館とする。また、ふるさと納税で選定された稚魚を水族館内のMY水槽や、屋外の養殖場に展示をすることで、納税者が魚津を訪れるきっかけをつくり、関係人口増加に繋げていく。

会員制度システム

入場料以外の収益源を確保と海岸線地区の終日利用を促すために水族館に会員制度を導入する。
 ■会費：1万円/年
 ■資金利用：水族館の運営、研究活動、環境保全活動
 ■特典：
 ①埋没林博物館の入場料とバスの乗車券がセットになった年間パスポート②魚津の飲食店の割引③会員限定イベント等

回遊を促すイベント

ミラージュランドのイベントとして海岸線地区を回遊するため以下のイベントを企画する。
 ■ワクワクすごろく
 時間に余裕がある人向け：すごろくを通してまちを回遊する
 ■ドキドキスタンプラリー
 時間に余裕がない人向け：主要箇所のスタンプを集める



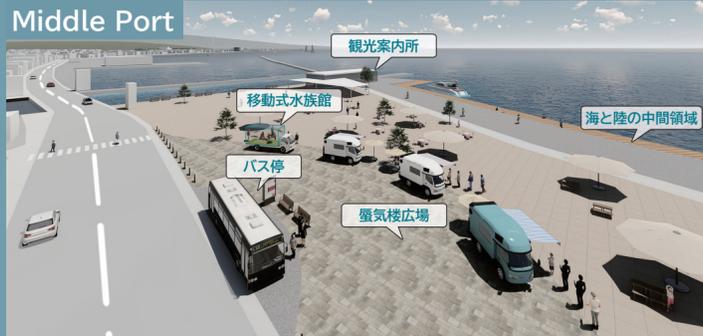
教育プログラム 生徒に合わせた教育プログラムにより、魚津の学習環境を整備する。

	生徒	教師	場所	教育内容
ENJOY	子供、観光客、ワーカー、お年寄り	飼育員、研究者、教授、専門業者	魚津全域の学習スポット	体験型学習、移動式水族館、等
BASIC	学生（小・中・高校生）	飼育員、研究者、教授	学校	教養（生態系、生物、環境問題）、等
ACADEMIC	学生（大学生）、飼育員、専門業者	研究者、教授	研究施設	研究発表、等



心地よい子育て環境・学習の場を創出
 旧大町小学校は交流・就労の拠点として機能する。就労の場としては coworkingスペースと託児所を整備することで、子育ての中でも安心して働くことのできる環境とした。また、既存の教室と木の縁側空間を活用してSDGsや生態系の教育活動の場として利用する。学びの場となると共に利用者の交流の場として活用できる計画とした。

既存小学校に木の温かな縁側を増築
 小学校の既存のボリュームに木架構の縁側空間を増築し芝生や小丘を取り入れてグランドデザインも豊かな計画とする。旧大町小学校の存在と歴史を残しつつ、木の温かみある縁側空間を付与することで多世代の賑わいを創出する。木架構には魚津産の木材を活用することで、魚津市民が木の環境意識を高めることにもつながる。



地域住民と観光客の交流拠点
 “North Port”と“South Port”の中間地点には、魚津の生態系を発信する移動式水族館、海岸線の整備、魚津の情報を共有する観光案内所、バス停を整備する。西日を眺めながら魚津市民と観光客とのコミュニケーションを生み出し、観光客が魚津の街の良さとの良さを理解する場となる。

魚津の生態系を発信する移動式水族館
 魚津の生態系を発信する移動式水族館は水族館の研究者が研究活動の一貫として、研究成果を観光客や地域住民に発信する。観光客は水族館以外の場所で魚津の生態系への理解を深めることができる。地域の子供は研究者との交流により将来の進路を考えるきっかけと成り得る。



海岸線沿いの整備計画
 魚津の海岸線は富山湾に対して西向きに面しており、夕日を眺めるには絶景の場所である。観光客や地域住民など多くの人がゆったりと夕日を眺めながら佇むことができるように整備した。また、サイクリングロードと歩道エリアを明確に分離し、それぞれ交差しないような計画とした。

河川沿いの整備計画
 早月川沿いの整備では、木デッキを用いて川との距離を近づけることで、魚津の生態系と触れ合える場とした。また、既存の車道道路を回遊バスルート、サイクリングロードとして整備することでモビリティごと、円滑に利用できるようにした。



空き家を移住体験者の宿泊場として整備